

商 沛雷 (スアン・ペーレー) : **The Folklore** (世界初演 / 本音楽祭のための新作)

中国の新進気鋭の女性作曲家、商沛雷に委嘱し、東京・春・音楽祭の公演のために作曲された新作。2022年に初演される予定だったが、コロナ禍により延期を余儀なくされ、満を持して今回、上演される。2 楽章からなり、『山海経』から採られた中国の伝説上の怪物「九尾狐」と「窮奇」(日本の「九尾の狐」と「かまいたち」に対応する)が各楽章タイトルに付けられている。いずれもそのキャラクターの描写において京劇の影響を受けている。

J.S.バッハ (于 京君 編) : **ゴルトベルク変奏曲** (弦楽三重奏版) より 抜粋

《ゴルトベルク変奏曲》は、1741年に《クラヴィーア練習曲集 第4部》として出版された。「ゴルトベルク」という通称は、次のような逸話に由来する。バッハは、旧知のロシア公使カイザーリンク伯爵から「不眠症の夜に気を紛らすような曲を作ってほしい」と依頼され、この変奏曲を書いた。それを伯爵がヨハン・ゴルトベルクというお抱えのクラヴィーア奏者に弾かせて愛聴したところから、この通称が生まれた……。しかし、ゴルトベルクが本曲を弾くには、あまりに若すぎたのではないかなど、この逸話を疑問視する向きもある。作品全体は、冒頭と末尾に置かれたアリアと30の変奏曲からなる。

編曲は、1980～82年に東京音楽大学で湯浅譲二や池辺晋一郎に指導を受けたこともある中国の現代音楽の作曲家、于京君(ジュリアン・ユー)による。今回は弦楽三重奏版への編曲から抜粋でお届けする。

ブラームス: **ピアノ四重奏曲 第1番**

1855年ごろ着手され、1861年秋に完成された、ブラームス20代後半の作品。初演は1861年11月16日にハンブルクで行なわれ、クララ・シューマンがピアニストを務めた。第1楽章はト短調のアレグロ。ほの暗い叙情に満ちた第1主題と輝かしい第2主題によるソナタ形式。激しい情熱を感じさせつつテーマを徹底的に展開・構成していく様子は、若きブラームスの面目躍如たる所(この主題展開に感動したシューマンは全曲にオーケストレーションを施した)。第2楽章はハ短調の「間奏曲」。流麗な主部に快活なトリオが挟まれている。第3楽章は変ホ長調、アンダンテ・コン・モート。穏やかで叙情的な旋律美とリズムかつヒロイックに高揚する中間部の対比が鮮やか。「ジプシー風のロンド」と題された第4楽章はト短調のプレスト。1869年に出版されて大ヒットした「ハンガリー舞曲集」の数曲は、本曲と同時期に書き進められていた。カデンツァ後の盛り上がりが凄まじく、嵐のような熱狂とともに曲を閉じる。